

分析化学会の現在そして未来： 企業側からの提案



宮 野 博

本年9月の北海道大学工学部での第65年会で、第3回産業界シンポジウムが公開シンポジウムとして開催されました。年会の恒例シンポジウムとなりつつありますが、この会の主旨について、初代委員長の花王株式会社の脇阪健司氏が第一回開催時に書かれた文章を引用することで紹介します。

「分析化学は、企業において極めて重要であり、過去から企業の研究・生産等の事業活動を支えてきました。さらに、最近の分析・解析技術の発展は著しく、観えないものが観え、解らないことが解るように、まさに分析化学は現象の本質理解に迫ることができるようになってきております。そのような背景の中で、企業の分析・解析部門は、最先端の分析・解析技術を駆使して、現象の本質理解や課題解決を行うことにより、研究開発や商品開発を最前線で先導していくことも求められております。今回は、分析化学が企業の研究開発・商品化をどのようにリードし、どのような事業貢献をしているかについての実際を紹介いたします。」

また、分析化学討論会では、「産業界交流ポスター」と題し、主にシンポジウム企画運営委員（18社（2016年9月現在））が、自社の分析・解析技術をポスター形式で紹介しています。

学会には、産学連携、学生・若手研究者の育成等、企業が^{かか}関わるべき重要な役割はいくつもあると考えられますが、これまで企業のアクティビティは小さかったと感じています。「産業界シンポジウム」や「産業界交流ポスター」が、新たなきっかけになるものと信じています。

さて、分析化学には、「安全・安心を守る力」、「モノづくりを支える力」、「科学技術を進める力」があると言われております。企業にとっては、前者の二つの「力」が重要であることは疑う余地もありません。さらに、企業においても、最先端の分析・解析技術を開発・利用し、他に先んじて新しい現象を捉え、それを起点として新しい価値を創造していることは、周知のところですが、その多くは研究としての価値も高く、企業研究も「科学技術を進める力」に大きく貢献してきています。しかし、学会内で企業の研究開発活動を紹介する場が少なく、また、私自身を含め、企業・産業界も積極的な働きかけをしてこなかったことは、残念であり、ともに反省すべきところでもあります。

私は、分析化学者は、科学技術の未来の扉の鍵を作り、開く可能性と役割を担っていると考えています。つまり、分析化学の担い手には、「産・学」問わず皆、科学技術立国の源泉・根幹として、重い役割があります。会員の半数以上を占める企業の人たちが、もっと参加し活動する、そのような活気あふれる日本分析化学会にしていかなければ、日本の分析化学は低下し、ひいては科学技術の衰退につながっていくように思えてなりません。

「産・学」で、日本の科学と産業を「支える」のではなく、「牽引する」分析化学の世界を、分析化学会が中心となって^{ひら}拓いていきましょう。

〔Hiroshi MIYANO, 味の素株式会社, 日本分析化学会理事, 産業界シンポジウム委員長〕